

膵臓がん死亡、胃がん抜く

がん社会 を診る

中川 恵一

です。ピロリ菌以外の生物は生きていけません。しかし、ピロリ菌はアルカリ性のアンモニアを作って、酸を中和しながら生存します。これに伴う炎症などが胃潰瘍、十二指腸潰瘍の他、胃がんの発症にもつながります。

欧米では日本に先立ち、冷蔵庫や水道が普及したことで、ピロリ菌の感染率が低下、胃がんは「希少がん」になっています。かつて日本人のピロリ菌感染率は8割以上でし

たが、20〜30代では1割、10代では5%程度まで下がっています。欧米には遅れましたが、わが国でも胃がんは「絶滅危惧種」になっていきます。

臓器別の死亡数でも、かつてダントツの首位だった胃がんは第4位にまで順位を下げています。最新の「人口動態統計」によると、2023年のがん死亡のトップは肺がん（約7万6千人）、2位は大腸がん（約5万3千人、罹患（りかん）数では約14万8千人でトップ）、第3位が膵臓がん（4万人強）です。

膵臓がんと胃がんの順位が入れ替わったのは印象的です。がんは時代や社会とともに姿を変える病気です。

膵臓がんは難治性のがんの代表で、全体の5年生存率は1割もありません。年間の罹患数は4万4千人程度です。から、罹患数に対する死亡数の

割合を見ると最凶のがんと言えます。

膵臓は胃の後ろにある長さ15センチの臓器で、消化液を十二指腸に分泌する他、インスリンなどのホルモンを分泌する役割も持っています。

膵臓がんが増えている背景には、肥満や糖尿病の増加があげられます。肥満ではリスクが3〜4割アップしますが、糖尿病では2倍近くに達します。とくに糖尿病の発症から1年未満では、膵臓がんのリスクは5倍を超えます。

急に数値が上がるケースも要注意です。過去1〜2カ月間の血糖値を反映する「ヘモグロビンA1c」を定期的に確認するとよいと思います。

糖尿病のほか、慢性膵炎の既往、膵嚢胞や膵管内の良性腫瘍の存在もリスクを高めます。O型以外の血液型では、O型の2倍近くになります。

さらに、家族歴や遺伝も重要となります。次回、詳しく解説します。

（東京大学特任教授）



イラスト 中村 久美

これまで日本のがんの代表は胃がんでした。私が生まれた1960年当時、男性のがん死亡の実に6割以上が胃がんによるものでした。しかし今、胃がんは減少の一途をたどっています。

胃がんの原因のほとんどがヘリコバクター・ピロリ菌（以下、ピロリ菌）の感染です。

ピロリ菌は免疫力が完成する前の5歳くらいまでに感染し、その後生涯にわたり胃のなかに住み続けます。

胃液は金属も溶かす強酸性